少年陰陽師～永遠に続く誓い～

宵千鬼江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少年陰陽師～永遠に続く誓い～

【Ｎコード】
Ｎ２９７７Ｚ

【作者名】
宵千鬼江

【あらすじ】
晴明と昌浩が現世をさってから１０００年余りが過ぎた。この二人に心を開いていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、再び心を閉ざしていた。晴明と昌浩の願いで今だ安倍家に仕えているものの、紅蓮の神気の強さにおびえる者ばかりだったからだ。そんな紅蓮を、道反の大神と知り合いだったため、時折現世に降り立ち、術を使うことまで許された晴明と昌浩は心配しながら見ていた。しかし一向に紅蓮が心を開かないので、晴明と昌浩は道反の大神に頼み込み、術を使って昌浩を現世に戻すことにした。

こうして、安倍昌浩は再び現世に生を受けた。

再会（前書き）

初兆戦です。少年陰陽師の二次創作。途中で挫折するかもしれませんが、よろしくお願いします。

再会

異界に閉じこもっていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、背後に神気を感じた。
＜勾、何の用だ。＞
＜なんだ、用が無ければ来てはだめなのか？ここは私たちの異界だぞ＞
＜用はないのか。＞
＜昌明に子供が生まれた。見に行ってみろ。＞
＜どうせおびえて泣くに決まっている。＞
＜行くだけ行ってみろ。あいつの霊力が珍しくてな。青龍まで見に行っている。＞
＜青龍まで？わかったよ。行けば気が済むんだな。＞
＜そうだ。＞
仕方なく、紅蓮は人界に顕現した。その部屋ではぐっすり寝ている赤子を取り囲んで十二神将がいた。
紅蓮が顕現したことに気がついた十二神将たちは紅蓮が予想していた通りの反応をした。
太陰は隣にいた百虎の後ろに隠れ、青龍は即座に異界へ戻った。多少態度が軟化したものの、１０００年前から十二神将たちの紅蓮に対する接し方は変わらない。それら全ての反応を黙殺した紅蓮の背後にまたもや神気を感じた。
＜勾、帰っていいか？＞
＜まだ赤子を見てないだろう。見てたらお前はそんなことは言わない。・・・・ほれ。＞
＜お、おい？赤子は嫌いだとあれほど・・・＞
＜その霊力、懐かしくないか？＞
＜・・・・！？昌浩の霊力にそっくりだ。＞
＜そうだ。泣いてもいないだろう＞

＜！！＞
心底驚いている紅蓮を見ながら、十二神将たちも同じことを考えていた。
そこに、昌明が来た。
＜お、昌明、この子の名前はなんと言うんだ？＞
＜あぁ、勾陣、十二神将の皆様もおそろいで。＞
紅蓮を恐れている昌明は言葉遣いに気をつけながら、赤子の名前を言った。
＜昌浩と。＞
＜＜＜＜＜は？＞＞＞＞＞
＜＜＜＜え？＞＞＞
異口同音に声を上げる十二神将たちの後ろで、紅蓮は声も上げられぬほど驚いていた。

親ばか（前書き）

少し前置きが長くなってしまいました。少年陰陽師、めげずに二作目です。

親ばか

昌浩の世話をしていた紅蓮は、１０００年ほど前のことに想いを馳せていた。名前も同じ、霊力も同じ、もしかしたらこの子は昌浩の生まれ変わりではないかと十二神将は期待していた。しかし、陰陽術を教えようにも今は平成、術など必要ないからと最近は術を受け継ぐことをせず、見鬼の才だけが受け継がれている状態になっており、十二神将も呪文を知っていても使うことはないので術の発動の仕方を教えることはできなっかった。悩む十二神将の中でただ１人、ここにいてくれればそれでいいと、紅蓮だけが昌浩を親のように世話していた。

＜どうしたんだ昌浩、そんな顔して。＞
＜れ～ん、ボ～っとしてた。だいじょうぶ？＞
＜ああ、すまない、大丈夫だ。＞
＜れ～ん、れ～ん、そといこ。＞
＜外？危なくないか？＞
そこに、勾陳が顕現した。
＜私とお前がいれば問題ないだろう。＞
＜それでいいのか？＞
＜闘将が二人だぞ！？この時代は害をなす妖怪なんぞそうそういない。大丈夫だ。＞
＜でも万が一ということも・・・＞
＜大丈夫だ。そうこういってる間に昌浩が出て行くぞ。＞
＜何！？＞
見ると、昌浩が裸足のまま外へ出て行こうとしていた。
＜昌浩、勝手に出て行くんじゃない。驚いたじゃないか。＞
＜れ～ん、あそぼ。＞
＜わかったよ。＞

昌浩に引かれていく紅蓮を見ながら、勾陳はつぶやいた。
＜まったく、親ばかにもほどがあるな。＞
勾陳の独り言にその場に隠行していた十二神将たちは大いに頷いた。

親ばか（後書き）

誤字脱字、あったら教えて下さい。途中で訂正したりするかもしれませんが、その辺はお願いします。

お供（前書き）

三作目。まだまだめげずに頑張ります。

お供

昌浩が生まれてから5年がたっていた。この時代の七五三だ。七五三を終えてお疲れの様子で帰ってきた昌浩は部屋で紅蓮と休憩していた。

＜ぐれん、あれなに？あれだよ、あのくろいの。＞

＜昌浩、あれが見えるのか？＞

それはとても力の弱い妖怪で、相当の見鬼の才がなければ見えないぐらいの雑鬼だった。

＜え？だってあそこにいるじゃない。いないの？＞

＜いや、いるにはいるが・・・・＞

そこに、十二神将勾陳と六合が顕現した。

＜昔の昌浩みたいなことになっているな。＞

＜勾か。あぁ、しかし今回は見鬼の才を封じる術はないぞ。＞

＜そうだな、昔なら晴明に頼めたんだがな。＞

そこに、ずっと黙っていた寡黙な十二神将、六合が口を挟んできた。

＜別に封じる必要がないだろう。今は昔みたいに妖怪が闊歩していないし、万一いたとしても騰蛇がいれば大丈夫だろう。＞

＜それもそうだな。だが騰蛇なら俺1人では心配だなどとほざきそうだ。＞

＜おい勾、どういうことだそれは。俺1人では心配だろう、どう考えても。＞

＜お前は十二神将最強なんだから大丈夫だろ、どう考えても。＞

＜俺は勾陳に賛成だ。＞

そこに、ずっと隠行していた玄武が顕現してきた。

＜我も勾陳に賛成する。それでも心配なら六合と太陰に一緒にいてもらえばいいと思うが。＞

そこに名指しされた太陰が慌てて顕現してきた。

＜ちょっと待ちなさいよ玄武、六合はともかくなんで私なのよ。勾

陳が行けばいいじゃない。＞
＜風流と風読みに必要だ。＞
＜だったら百虎でもいいじゃない。＞
＜太陰の姿かたちは子供だ。昌浩に近い。＞
＜で、でも・・・・＞
紅蓮が恐い太陰は必死ににげようとする。それを見かねた勾陳が折れた。
＜わかったよ。私がつくよ。＞
結局、昌浩のお供は勾陳と六合に決まった。

お供（後書き）

誤字脱字、気付いたらお知らせください。

小学校（前書き）

少年陰陽師二次創作４作目。まだまだめげずに頑張ります。

小学校

昌浩は今年で６才、今日から小学校に通うこととなる。重いランドセルをもって、昌浩は白い物の怪と共に家を出た。

＜もっくん、行こう。＞

＜おう。＞

＜もっくんさぁ。＞

＜ん？＞

＜学校ではあまり目立つ行動しないでよ。見鬼の才がある人がいたら大変だから。＞

＜大丈夫だって。俺が見えるくらいの見鬼はそうそういないから。＞

＜でも、勝手な事されると気が散るんだよね。＞

＜大丈夫、大人しくしてるって。＞

＜絶対だよ。＞

そして、学校が始まり、最初の授業。

＜は～い、ここがわかる人～。＞

＜＜＜＜は～い。＞＞＞＞

安倍家でさっさと知識を神将たちに叩き込まれていた昌浩には朝飯前の問題だった。と、そこに物の怪の合いの手が。

＜こんなの昌浩にはどーってことない問題だろ。別に手を上げる必要ねーんじゃねーか？＞

＜そんなことないよ。授業なんだからちゃんとやらなきゃ。って言うかもっくん、机の中から出てこないでってば。＞

＜いいじゃねーか。どーせ俺が見える人はいないんだし、お前が小声で話せばばれねーって。＞

＜そういう問題じゃないの。＞

＜じゃあどういう問題なんだよ。＞

＜俺の気が散るんだよ。呼ばれてるのに気付けなかったりしたらどうしてくれるんだよ。＞

＜そん時はそん時で怒られておけよ。＞
＜怒られんのは俺なんですけど。＞
＜知るか。＞
＜ちょっと安倍君！さっきから呼んでるんだけど。何ボウっとしてるの？＞
＜す、すいません。＞
＜あなたはボウっとしてることが多すぎます。後で私のところへ来なさい。＞
＜はい・・・・。ほら、怒られたじゃないか。今回で何回目だよ。初授業だってのに。＞
＜俺は知らねーぞ。お前の集中力の問題だ。＞
ちょっともっくん！！っと叫びそうになるのを我慢して、昌浩は物の怪に半眼を向けたが、当の物の怪はというと、前足で器用に首の周りをワシャワシャとかき回していた。

小学校（後書き）

誤字脱字あれば教えて下さい。

卒業式（前書き）

まだがんばれそうです。５作目。

卒業式

昌浩は今日は待ちに待った卒業式。今日でランドセルを持って小学校に投稿するのは最後。相棒の物の怪のもっくんはもちろん、十二神将六合、勾陳、天一と、昌浩の父親の昌明と母親の露美がついてきた。

＜今日まで長かったな。俺は嬉しいぞ。弟子が独り立ちするみたいで。＞

＜弟子入りした覚えはない！＞

＜だから例えだよ例え。＞

＜どんな例えだよ。＞

そんなやり取りを見ていた勾陳と六合は物言いたげな顔で見守っていたが、口を挟むことはしなかった。

＜＜キンコーンカーンコーン卒業生の皆さんは至急体育館にお集まりください。キーンコーンカーンコーン＞＞

＜だってよ。行ったほうがいいんじゃないのか？＞

＜そうだね。でももっくん、式にまでついてくる気？＞

＜大丈夫だって。俺が見えている人なんかそうそういないって。＞

＜それはそうなんだろうけど。絶対にいないとも限らないし。＞

＜だったら勾と六合も同じだろ。＞

＜あの二人は常に隠行してるしもし顕現したとしても服装が変わってるだけで少し変な人にしか見えないって。・・・多分。＞

その後に多分ということを入れたのは、誰がどう見てもあの服装と背とその他諸々は人間に見えないからである。

＜まあ、人じゃないしな。＞

＜そうなんだよね。＞

そうこういってる間に体育館に着き、式も始まった。式の時々に物の怪が横で騒いでいるのを除けば、式は無事に終わった。１ヶ月後には昌浩も中学生である。

卒業式（後書き）

誤字、脱字、あれば教えて下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2977z/

少年陰陽師～永遠に続く誓い～

2011年12月16日00時50分発行